

特42

679

萬道之眠覺

合卷



013748-000-0

特42-679

萬道之眠覺

天田 八千夫/著

M16

ABA-0235



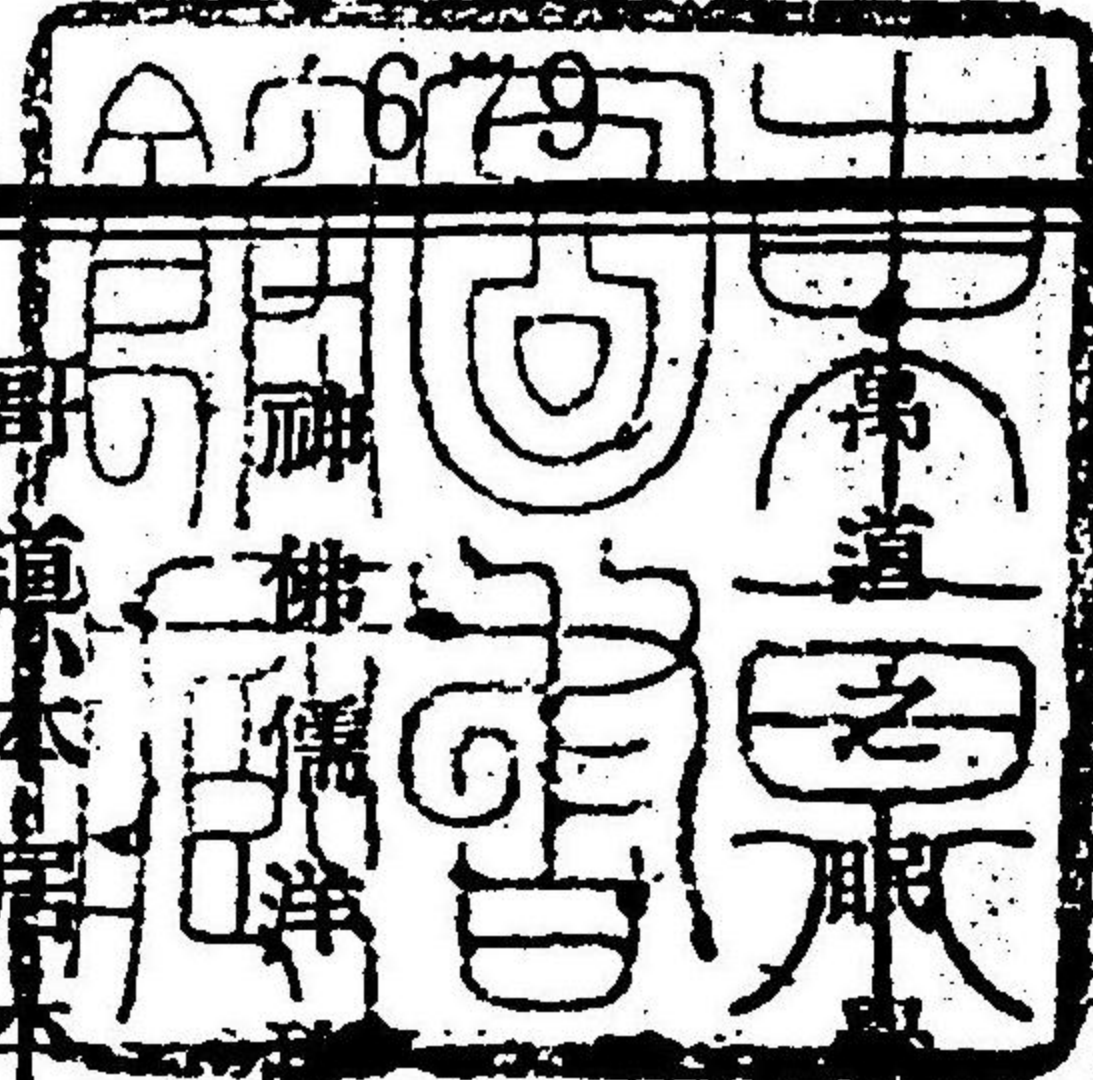
明治十六年一月出版

萬道眠覺

乾之部

天田氏藏版

特42



乾の卷

天田八千夫脱作

哥道、本居、本田、大國、杯、其、外、銘、と、流、義、區、別、有、る、し、
耶蘇教、神道之中よも、黒住講、トホカミ講、報徳流、

一 儒道、此中よも孔子老子其外流義區別有るし

一 佛道、四宗八宗拾貳宗、只今殘有八宗よも十宗よもせよ、一

宗ツ、分り又其一宗、此中よも西派東派、古義新義杯と、區

別甚るし

一 洋學、色と區別有るし

一 耶蘇教、モ四五宗よも區別有るし

一醫道 武道 劍道 山伏 天文學 算術 方位 易道 心學 天心學 神信心 佛信心 兩部信心 其外諸遊藝道 數々

右各道何れも天下を治るの道か、身と治め家を齊ふるに道欲、地球之事柄を能知、智識を磨きて、辨別するに道り、病を直ス道り、人の心を慰めて、命を延す道か、顯世ハ假の世、如何様、ても、不厭、後世を大事とする道る、何れも天下國家よ、一體かき道ハ有ま

夫々銘々鍛錬之、人ハ格別、左モぬた人よても、我信仲之道社、天下大道と思ぬなるへし、思及ば社辛抱も、出來たも、ハナリ

左すれば道道と數多き道にて甚以紛敷事あり、人心も銘々、心、心外は是を見る時ハ、何れは是、何れを非や、びるう、甲乙之見極メも、附兼する物也、何れも我道并り知て、人乃道を知らば、馬鹿死て、自身免許で居故、わけが分らば己を知て、人としらざるに、論あり、何れの道よ、至極能所も有、又惡敷所も有べし、又古今之違ひ、國柄之違ひ目よ依て、善事が、惡敷で成、惡敷事が善種と成替る事モ、有べし、又幽宜計り論して、顯明ハ少シモ構わざ、取まらば、是とのみいふて、論よ、か、た、ざる向モ有、又肉眼ヲ以て、見へる所る斗りを論して、顯れ顯利の、小理屈并りといふて、神哉佛の有事を、不知して、我愚かよ、不知事

ハ、扱置テ、神佛ハ顯メ見ヘ、不給物故、有名無實此者にて、取に
たゞだといふて、一圓論いけだ、信心い依テ、神佛い靈現利
益を蒙リ、一人有時ハ、正法に不思議ないていふて、一切迷ひ
者之様い思ひ極めて居、却て大心なる迷ひ者モ有、其道之本
源い源いらべ其師匠い見開きいヨリモ磨き上ケい師匠ヨリ
モ上い出いハ、對大祖祖師師匠先生い無禮之様に、心得違
ふて居迷ひ者モ有、又は其様い深き邊いハ、更い不心付い古いへ、
或ハ中古之書物を續て、此書い則有い依テ、杯いいふて、本依
元源のいらべハせいて、書論のみい生涯日い暮す人モ有、
我祖師師匠ハ尊ひいといふて、我ハ迪いもろふハいよふからぬと

思ひ極めて、縮みてさへ居ば、敬ひの様い思ふ、愚知な人モ有、
迪いも出世ハ出來ぬいといふて、覺悟い終る者モ有、懸る御時節
よハ乍恐、

朝廷之御次迄ハ、出世に遠慮ハい却て、忠臣ぢやと、憤發す
る人モ有、開化い日い進歩の人モ有、因循固息いの舊習モ有、又
文明開化ハ、アヤチアキヲカニナリテ、日い能方い、ヒラケカ
リルいといふ事なるべし、然るを學問いフミチいまなぶト、書と
思ひ文字いを誦いなひいふみいをあきらいかい讀知いて、開ケた風俗い
ばいと、讀違いて、帽子い洋服い蝙蝠傘い鞆頸卷い其外い異リいたる、風
俗いにいへいばい開化之様い思ぬ、行過る人モ有、眼先の小

仕事計りをして、大ケな仕事の様よ、思ふて居人モ有、古しへの、
正敷事計り然、要として道がちいさく成て、間よ合ぬといふ
事、ことぬ人モ有、清淨一ゑんを、いふて不淨よ恐る詳りよ
成て、こと御時節よハ、間よ合ぬ人モ有、不淨ハ更よ厭いとぬ
といふて、ムチヤクケヤノ、人モ有、慢心計りて、あふむ人モ
有、勇氣の權敷が、弱よくて、間よ合ぬ人モ有、身治らば我家に持
ぬ人モ有、當時を錢もふけが第一等ぢやといふて、我家持計
りと思ふて、天地の事ハ如何成ても更よ構かまぬ人が、大方ナリ
無欲むよく人モ稀まよハ有ども、無欲むよく計りもやめられば甚敷剛
欲よく人モ有、外國を大ケよ好人モ有、甚敷嫌ぬ人モ有、儉約と

落悵惜たふの差別の分らぬ人モ有、長と然なしき人モ有、葉手は人モ有、
世が末よ成ると、神佛之、徳モ顯れ、行末ハ如何成事やら、心
細ひと、いふて、消入様を心よ成て、早ふ死だ方が、却てをい
いふて居、馬鹿ばか者モ有、天地モ二度の開闢の時が來て、古し
への神世ヨリモ、遙とほりよ尊たかひ生の神代が、來るといふて、勇ゆうみ
進んで、居人モ有、小乃誠ハ、大の誠よ、難たが敵物なれども、人心こころち
いそく味あじくて、大の誠が見るざる故よ、誠、信心、忠孝トモ、太る
事とさことざる人、大方也、其外百面ひゃくめんに、如變人心ごとくこゝろく、な
るべし、其是非ハ事柄よ依て、定メば定メ難たがうはべし

一哥道ハ、我國本体ハ道にて、本心も勤むる業モ其所ニ至リて、
 心ハ儘を詠れば、天地の鬼神モ感ゼーむる、最モ尊き道也、
 かくる活哥ハ詠る、人モ偶々ハ可有之大方ハ、其場ニ至ラズ
 譬へ、勤免ハ、届かざとも、本心丈成とも、其場ニ至リて、詠られ
 ば可也、然るを只てよとは命續き、古言作例、文字の夫ひざま
 等に、身を入、哥の化粧計^{けいよう}を、本体として、肝心要メの哥の入
 神も、心付て、其所を、いらべる人稀也、哥ハ、万國ハ教へのものと
 みるや、いふ事ハ、勿論いらざ、畢竟慰^{なぐさ}み事ニ成て、天下ハ益
 すくなし、譬療^{こい}れ哥、口合よても、國家も、大益有、哥を詠たし、哥ハ活
 物も、かゝざるも歌作りが、多くて詠人の本心が、其所るへ不

至して、口舌のみニ成故ニ、死物と成と、見へたも、ふれば
 藁^{わら}人形も、錦を着せしや、同一哥也、夫よりハ、漢語交り乃療^{こい}れ
 とも、珍よ、哥も長しや、講釋モいらざ、誰が聞ても、早分
 ガ、一て忽^{たちま}ち人乃爲ニ成様も、哥療^{こい}れ口合もとも、詠られれば
 譬へて見れば、生て居人ガ弊衣^{やふれ}を着て居様も物で、忽ち益を
 産出スも、道具建計を調ふた哥ハ、鬼神ハ、扱置我等ても、感
 心せど、哥ハ執行ヨリモ、誠の執行を、先よすべし、誠あらば
 ば活哥も成、夫から次ニ、哥ハいらべとすれば、生た人が、錦を
 着たる、兼備之哥ハ、詠るべし、誠が、哥ハ魂^{たま}ひ也、體^{からだ}を先よ作る
 ハ逆かり、魂を調へ體を作らば、順也、偶々ハ、天地ハ動かす活

物は哥を詠人も可有、感心の事あり、

一洋學モ、至極、結構成道にて、地球は有島、事柄を委しく調べ、勉勵して、知識を磨た、窮理研窮を正して、便利を考へ、國益を増事、爾誠大ひ也、權は顯利よ、賢しくして、誠は感心の器械多く、國益有廉く、不ニ小數、然れども、賢は利を、本体之道を思へり、賢利よ、さうへ仁、仁徳ヨリうへよ、誠、勤王其うるに、敬神や有事よ、心付は顯利著りて、幽は幽理も味きよふ也、其場之執行有たき事ナリ

一黒住講社、其源黒住宗忠は神在世ハ、世は無類之孝子、誠の人よて、既に兩親は死亡を悲し、孝心厚き處よ、心を痛め、癆瘵の症と至り、京都は、大醫モ、一兩日之内と見立テ、手を放し、藥一服モ不出、頓慶ナル、名易者モ、一兩日之内、絶命や言切程之、場よ望みて、生しいやいふ、望みを繼れ、是迄御生し、被下有御禮、且ハ御暇乞と志て、

天照日ノ大御神、拜禮内之、乍恐モ、日ノ神一体之天心に至り、前顯之、如き之難病立所よ、全快難有モ、開闢以來の誠乃、大道を踏開かれし、物よて、是迄世は有來りの、諸道の及所よ、るるを依て、衆人種々の蒙御蔭、積年之心の纏れを解、不治と定り

ある乍産れ不成人難病業病之治り一者モ夥敷事よて其誠の高徳も幾十万人か飯服いふ程の言語筆紙に盡さるるき大徳ナリ然るも在世と違ひ方今世も開ケる處ハ大ひも異り誠の本体之大道を皇學本体も仕ふれ書物を以テ鍛鍊して本体の寔を失ひ口舌もハ聊誠モ残り有と雖モ門人等心拙くして師の道と穢せし事の可悲ナリ元來神道の取捨を可受道よあらざ神道を加取捨可仕大道ナリ此上モ改れば天下の大道ナリ改めざれば神道代中の一流の小路ナリ嗚呼可惜シク

是迄世も行れる神道ハ萬國を従へるに權勢ハもとをりか

く神道くや鼻高よ言れても天道ろく見る時ハ天道の中ハ漸一流の小路ナリ

一神信心佛信心兩部信心等にて天狗其外外道神又卑一きハ狐狸等を祈り又ハ失ひ聊乃不思議を信し人を誑らかり或ハ金銀を貪る向モ有是等を論はは足らざケ様の曲信心もて正敷信心を穢し事大ひなる罪ナリ依之世の中の人信心を甚だ輕しめ物を不知愚人計り信心をする様も思ふて邪法のみ證シ有て正法もハ不思議なきやいふ元來正法も不思議なきにあらざ天道も可叶誠心を以正敷事を祈りハ神佛トモ信する人の誠を受給ふて靈現理益の有

と然し、古今不ニ少數、是又叶ふが天理也然れど、人心穢れて、誠
を失ひ、曲り心ヨリ人より、耻敷て、言れざる程に、非義非道
なる得手勝手の事を、曲神小神邪佛等に、聊此誠を以て祈まば
聊の證し、忽ち有ナリ、正神正佛トモ、曲り心ハ移らざ、故に
證しぬし、然れど、人の心ニ誠を失ひ、曲り心で祈りて、證し
なき方を不言、神佛ケよ、證しの、かた様も言ハ、甚敷僻言ナリ
既に平田大人の穢れ信心といふく咎メられあるを國學者流
代人々曰が得手勝手ニ間違へて神ハ祈まよ不及物之様心
得違ふて只大被壹本祝祠位ひ奉りて事足様に思ふハ大に
ナル間違ひナリ崇敬を祈まば神ハ人の敬ひよ依て威

を増給ふ人、神の恵みよ依て、運と益の理にて、何程よても、
敬神して、祈まらば、神徳ハ増益物也、又、正敷信心乃中よモ、神
此上下の區別、公私、大小之區別甚多志、志し有ば、再問を乞、爰
よ畧す、多ひ中よハ凡人の不及、正敷大徳に、大信者モ有る志
感心の事ナリ尊キ、御神徳を、驗し給るが、敬神之信心ハ神
國第一之、最モ尊キ司之事也、公私、邪正モ、純と、まて侮ど
人わ、大ぬる、誤マナリ、未來を思はぬバ、佛信心ハ、勝手なれど
も、君親夫、其外、恩人之事柄も付、精々誠に、限マを尽し、人力に
不及時を、神も願ひ祈るハ、忠孝節義の誠ナリ、譬へ其丈よハ
届らざ、都て、願ひ事は、一切不致トモ、此神國も生れたる人ハ

此上の御蔭に有無も不抱今日迄の言語筆紙も尽し難き、
神と帝之限りナキ御大恩の御禮御報謝之信心のまゝな
た人ハ第一敬神の御教則も背き人面獸心といふる

一 耶蘇教ハ、教導の趣ハ、神道に似寄る、天地人魚鳥千草万木に
至迄、一切萬物悉皆、天主造物主の恵みも依て、顯れ出有物也
依て、此恩義を可報本体の道あり、天主造物主、ヤホハデイス
も、同神にして是、天上よます父の神ナリ、開祖は イエスウ
キリストウといふ人なり是十字架も掛る一人と有也依て
ヤホハ イエスウ キリストウ 斗を拜みて疑ひを放れて

掟テを、堅ク守リ、一心も信ざれば、死して後、天上界よて、父
ヤホハの御元に生るゝなり、又外の神を拜すれば、嫉みの神
みて、罰が當ると、天道案内也、以ふ書も有ナリ思の外の甚狭
き道にて、普く大道を言難し、然終ども、一言も空言ハいとぬ
物と見へたる、一通感心也、乍併譬へ公法も背くと、雖モ、キリ
ストウ此定法もハ、聊背かれど、方一聊よても背るハ、未來に
て、爲レ大罰が當る顯世も、三五代迄も、崇と恐らうした
物ナリ、故に天の條理を不弁頑愚之者も、頻るも一心決定と
ナルト、見へし、傳導師モ、舊約全書、新約全書杯も拒れ恐れ
ら、みえ、居由ナリ、可愁有様ナリ、我國体もハ、甚難き道也とる

一經事の能事いつくの利猶又陰のつまでが陽を生じ場も
有故より大いなる能種を産出ス事必有ベシ

一ロウマノカソリウクハイエスウキリストウノなほり違
ひよて、切支丹と、言物と思ひ、根方は耶蘇を同し物にて、大
祖ハ、イエヌウキリストウと見へり、耶蘇と清濁は二つに分
れぬる物かと察せ、我^未だ其大導師も、勿論信者よりも、出逢
逢ざるが故にくとく思はざ、耶蘇は傳導師より聞ば、人
病を治し、其外色との不思議を顯すや、いふて、昨^{いづ}の器械杯
ヲ以テ、人を誑^{たぶ}らり、後者にて、取に足らざとのみいぬて、耶蘇
ハ、キリストウの弟子十二人、難場之時、不思議を顯し候者よ

て、其後千八百年程之間ハ、絶く不思議ハ、無と申を自慢也我
考るよ、素々天の神が嫉^{ねた}み此神故に其情移りて、なたみよて
双方不和ナル者と、察せ、千八百年之間、不思議を顯せ、
ふわ、耶蘇の門人、未^{まじ}熟よとて、不思議を、より顯せざるの也
然るや、我が未熟をみよて、思は、惡口をいふと察せり、いかん
や、斯れば、人の爲に成、誠よ叶ふよ、不思議わ有方が、尊きの
ナリ、無え不徳ナリ、今の門人ヨリ、古しへの十貳人ハ、不思議を
顯したる方が大徳ナリ却て、ロウマノカソリウクの方エ高
弟十二人の不思議が、残り傳り居と見へり、空言^{うつわ}詐り計を
言てハ、千八百年之間の、人々信仰可致答を、實の不思議モ

有ハ社人ノ信ぜると思へる、不思議モ不思議ニ依てハ卑シ
人ノ爲メ成、不思議ニ有社尊と、昨りませり有所ハ惡シ右
ニ推察の考ヘカリ、何卒縁を求めて、（馬）承り見度思ふナリ
乍併何程能と言と雖モ臣下の國の道故ニ我國体ニ難合
事ハ不聞モ知て居ナリ、病者の救助其外人民の爲筋ニ可成
誠ニ叶ふ不思議ハ、目出度、慰なぐさみ此不思議ハもとへ有とも論
ぜんに足らぬ

一 醫道ニ仁術ニて人の病を治し、人の命を預る道ナリ、醫は病
ニ治療ハ預れとも、病者の命は、預らざといふや雖モ、肉休を任

せて、治療ニ、預るうへらるるを、病者の爲メハ命迄モ預ケる也
命ハ預らざといふハ、畢竟醫者の逆道ナリ、然終ハ、假メも命
と預る役ニて、不ニ容易極大切成道ニして、輕ニ敷不可思故ニ
謝義の、不抱ニ有無、精ニ誠を尽し、病者ニ深切の心、無限厚く
て、人の病ぬ終ども、我身に煩ハ有て、難義なる事ニ思ひ双べ
て、己が力らの不及處ハ、致方モ、無之候得ドモ、我力々之及ぬ
の限りハ、精ニ其分を可尽事也、人々いへば、輕き様ぬれドモ
其根本ハ、

天照神之分心體を、皇帝之大御寶々を奉預と、相心得方事大
切ニ可致事也、醫ハ仁術之事なれば、先方之謝義等ニハ、聊心

と不寄施し助ける心と、行住坐臥不忘が道也、故に衆人ハ如
親敬ひ、尊み、聊不足なき様よ、可報恩爲、分限相應之、謝義よ及
ふが、又道かり、然るを双方共、心得違勝よて、醫ハ仁術たる事
を忘れ、民の謝義の無之不足を思ひ、金持をハ度く見舞、何も
かた貧乏人エハ、更に不見舞、是大ひかる心得違ひ也、民モ又
然る、醫え仁術よ付、よて呉るを、當り前の様よ思ひて、當禮等
も、不足いし、其上御負ケよ、醫者之、勤方之、不足を言ハ、双方
トモ、我手元をいらべど、人ハ手元の間違ひ、咎りを見て、我方
を不見論也、人を見るに不及、我方を見るが、双方之爲也、醫よ
限らば、神官僧侶、學校先生トモ、都て人よ物を教ゆる人ハ、一

切矣る方へハ、心と不寄我職掌の教へ導く方を、要えとびべ
し、民乃方ハ、夫よ銘よ分限相應よ、不ニ小數當禮に及ふが、又當
前也、不仕ハ、民ハ誤りか、君子ハ、教へ助けて、人よ養れ、小人
ハ、教へ助けられて、君子を養ふ、是相生也、双方ハ、道也、然れば
和漢蘭西洋之書籍を、よびて、勉勵して、智識を磨き、窮理研窮
を正して、肉体之内よ、有る事柄を能知、病ハの成出る處ハ
元源をよらべ、今日現れ出有處モ、委敷見定メ、弁へ知る事が
醫道乃肝要かよば、其邊のいらべハ、最早余程行届可有、いら
願くば、書籍之字ハ、事柄を知る之學者にぬるヨリモ、病
を治す事の上、手ハ、學者よ、成て貰ひぬ、其方を要めよ、此

ば、其方が要めよなれ、さうして今一層之元と云ふべ、心代如則現れ出たる元、肉體之顯れ出たる元、我此身の顯れ出生て居元等を能く知らべ弁別べし元來人体といふ物を、人作之品柄よらば、人作之品ハ、漸く死物の生人形位ハ物の物よて、何程之美人よても、見物語りの物よて何之用弁モ殆ど、如_二我等_一愚る者ても人力語りを以て持ふと申ても、指一本モ出來る物にあらば、左すれば生て居こころ肉休トモ出來始りたる元源之恩義を知り奉報が醫道に限らば、萬道之源みなともと日本て申せば

天照日ノ大御神之御身並、日ノ御國と、トモ輝た玉ふか

り、日ノ御國之主宰サイと申して御主ト神と有也、佛道では大日、儒道西洋杯よて、日輪又ハ大陽といふ、其名目之論未決其小論ハ、暫く預り延し置て、要めといわん、何ていふが名ハ何といふても、今日暖比物之司、生物之根出現まはせば夜が明、山代端よ入賜へバ、日が暮、此御行道の恵みよ依て、萬物夫よ生ず、次よ月地球星、何れモ見ユル處ハ尊き物也、日の國の切口、日の神なりませるの生坐國故、我國を日本と、いふナリ、依て萬國よ勝れて尊ひ、日代神といふが氣よ入るば何ていふても差向許ヌが、日よ蒙り有所之、無限御大恩之、報謝を名つけて信心といふ也、心ハ天照日ノ大御神の分御魂、肉休は月讀地

球此分休也、突息ハ月の息也、引息ハ日氣の息也、故ニ肉といふ字ハ、月ヲ讀也、暖リハ、日此德、水氣ハ、血德ハ、月德也、第一目の見ユルといふモ、分魂此、心が分休之、體ヲを透みて見るの也、心が肉休を夫めて見るといふても、夜ハ見へど、晝てあけてハ、見えど、左すれば、見へる目モ、人力よあはす、皆神此、惠み也、明り也、暖ニ限らず、喰ふモ、嗅かモ、言モ、聞モ、歩行モ、臥ふモ、何モ角モ、一物モ洩る物なく、悉皆神德なり、西洋みてハ、天主造物主杯と、いふトモ、空論の様なり、大日日輪大陽日ノ國其名目ハ、何と、いふにもせよ、夫ハ、叔置、現在肉眼ヲ以て、見ユル物の名を、其國此中之、主宰之神ハ、天照日之大御神也、空論よあ

らど現在目よ見ユル、誰ても、知て居處の日々之恩義を奉報が道也、醫道之處に、可出答あき様ねれども、西洋ヨリ發りて此節人之肉休之中之、議論専ら盛んニ流布由也、左すれば生て居元、人体之出來始りを、今一層之とらべ、有度思ふが故ニ、出す也、西洋各國ハ、都て、短命よして、形ち之業に賢き國体也、故ニ窮理勉勵して、諸事コサカ黠しく、業を以テ爲事ニタイテハ、誠ニ感心の事多し、然れども、余ニ勉勵仕過るも、苦勞よなる故、短命か、素々短命之國体故ニ、萬事アセ懋りて爲事烈し、依之益々短命ニ、彌増オモ陷る也、我國体ハ、命ち心を掌る國体故ニ、神心の寛大質ヒツ朴ボク之産付よて、長壽之國也、各國ヨリ我皇國の人と見る

時を阿方此様と思ふなるべし、寛大之神心が、情弱ダツヤクに陥り、獨り我國のみ、世界之形勢を疎ソツしとの御宸翰之通りに成居ナリ、情弱を可直ハ、勿論ぬれども御上様よナイテは、御一新以來、寛大之思召ニテ、下方人心大ケヤ行直り候様、被爲思召、可有御坐哉、候得ドモ、下方心得違マて、左も無之、西洋各國よ此み習ふて、人心益々教理を拒コトまれ、利欲を以て、黠シヤクめを以て成、眼先此小理屈辨りを能いふて、賢くハかる様なれども、却て本心此誠を失ひ、人氣益々、惡敷成行様也、甚以心得違ひよて、次第に神之御心に隔マタり、天然長壽之國徳を失ふなり、各國此者ハ、命は天命と定めて、心を傷イむ

るが、故も煩ひ煩ふが故も死シむ事と云ふ事と云ふは、各國ヨリ業も賢トクき事を教ゆれば、我皇國ヨリハ心に寛仁大度之寔コト之神心を受得て、長壽とする事と、手引て遣が命も心と、掌る國休之受前ぢや、然る上も我皇國之醫を、支那和蘭陀西洋各國へ、屈カケむ辨りよ珍ウツクシき也

大己貴命、少名彦名之神ヨリモ、尊き生神之、名醫も、成給ナリ也、
一、乍併右様申しても、多オホひ中よハ、尊き御方モ可有感心の事
なす

一佛道ハ、良即身成佛之道故も、道の中よハ、此身此儘生佛と云

ふ、名僧モ、可有無_レ左_レ僧といふ、本体之、佛ヶの御心、又佛道を開かれ、釋迦尊、並ひよ、祖師の御心と云らば、地獄極樂の、有所モ、定りからば、只經文よ、如則有杯_レ、言て書論_レみして、佛ヶの御心と云らば、自ら佛ヶよ成て、凡人を佛ヶよ引導、可有爲事と心得、抽_ル丹誠、僧侶モ、偶よ、可有大方ハ、西方十_レ億度之、極樂_ルら、私_レも、佛ヶよ、よふ成_レ海せぬといふて、戻つて來た者が、ぬき、片便りを幸ひに、並合ハ、上の部が、佛學者、佛マナヒ_レ、佛學者なら、よければ、經文知之、佛學者、中以下ハ、糊口學者が多ひ、我佛よ成、人を佛ヶにまゐるヨリモ、今日之評_レ、第一よ、志_レて、奇麗_カ、衣を着て、佛様の、信心ヨリモ、壇中之御機嫌を取

て、上り物乃多ひと好、當世流之開化之僧が、稀には有、佛が泣て御座有るう、夫と申モ、追_レ貧乏をして、飢渴_{キカク}よ死_レて、餓鬼佛ヶよ成てハ、からぬとの、用心なるべ_シ、一應尤之事也、其位ひの、^{きた}き餓鬼心なまば、死_レても、餓鬼よからふも云れぬぞ、其邊よ心傷_{イタ}みて、苦勞ぬらば人を誑らりして、佛を蔑_{ないが}如_らよ、^ば化_バを消して、正休と顯_シ、農工商之内よ、歸俗志て、_レりるへし、元來神道を產出ス切徳、佛道ハ、隱徳の誠を、主よ勤て、願_レ世よてハ、一切物_レ、捨_レぬよふよ、人之捨_レる物迄も、捨_レひ揚_レ世_レ、爲_レ人の爲_レよ用ひ、我爲_レヨリハ、人の爲_レよ要と

て人ヨリ施して呉れハ歡ひて受、吳ざれば、吳せともよし、都て人ハ勿論、禽鳥獸畜魚鼈蟲衆生一切を助ケる道なき、依て肉體ハ、假乃世に住居せし心ハ、佛一體よて、人ヨリ如何様ハ惡敷き事を向るとも更よ不厭服モ不立、佛ケ之大慈悲之心をすへたとへ渴死するとも本心ハ佛心ハ不爲動といふ、即身成佛の道かや、佛道ハ、陰の誠の奥義よて、凡人よてハ、一通_レ勤免得難き、尊き感心ハ道と思へり、志かし我國体ハ、難_レ合處モ、有ドモ折角佛門を信ぜる位ひならば、安心を遂るか悟りを開くかして、此身此儘ハ、生佛ケニ成さき物也、左にれば佛ケモ歡ひ玉ふべし、佛門よ乍入、佛ケよモよふねらせ生

涯書物等ヲ讀て、物知ハ書物箱よ成て、日を暮す僧侶ヨ問、佛ケが言置しも其弟子達が書殘ししも、物知學者よ、流る積りてハあるまい、是等乃僧侶ハ、佛ケハ眼から見る時は生する、物を喰ふ字引と見ると、可_レ悲事ならせや

一 眞宗よ問、中山親鸞の問答記と見るよ、此度貴僧一流ハ法興行、願書の表よ釋迦教法仕給ふ法を弘めらるるよ、諸宗と格別之事也、貴僧一流と立、報恩の二字を題目とするや、有、其報恩之二字の眞意ハ、いりよ、親鸞答て、曰ク報恩之二字の眞意や申ハ、日月の御恵み、又ハ天子の御恵み、我等が法、此三ツ

の可奉報恩事を、我等門徒ニ、委敷授ケ候也、往古より今に至迄、萬民を救ひ給ふ、日月乃御恵み、憐み給ぬ、天子の御恵み、我等の法の恩と、此三ツハ、廣大なる御恩、日々報可申事候と、又問、俗民ニ報恩ハ、二字ハ、譯ハ、委敷不教して、阿彌陀之稱號と唱させ、僧尼計ニ、教へ傳ゆる時は、末世ニ至りて、報恩の二字ハ、眞意ハ、唱へ失ひ、念佛執行ニ、なるべし、親鸞答ニ、報恩の分譯聞せ、我等於堂舎報恩講執行所ニ、門徒を召集メ、説聞せ、其上年ノ戸毎に報恩講ハ、唱へ、執行仕候間、末世ニ至迄、報恩の二字を失ぬ事なしと答、右答ハ、赴、御聞濟よて、眞宗門御

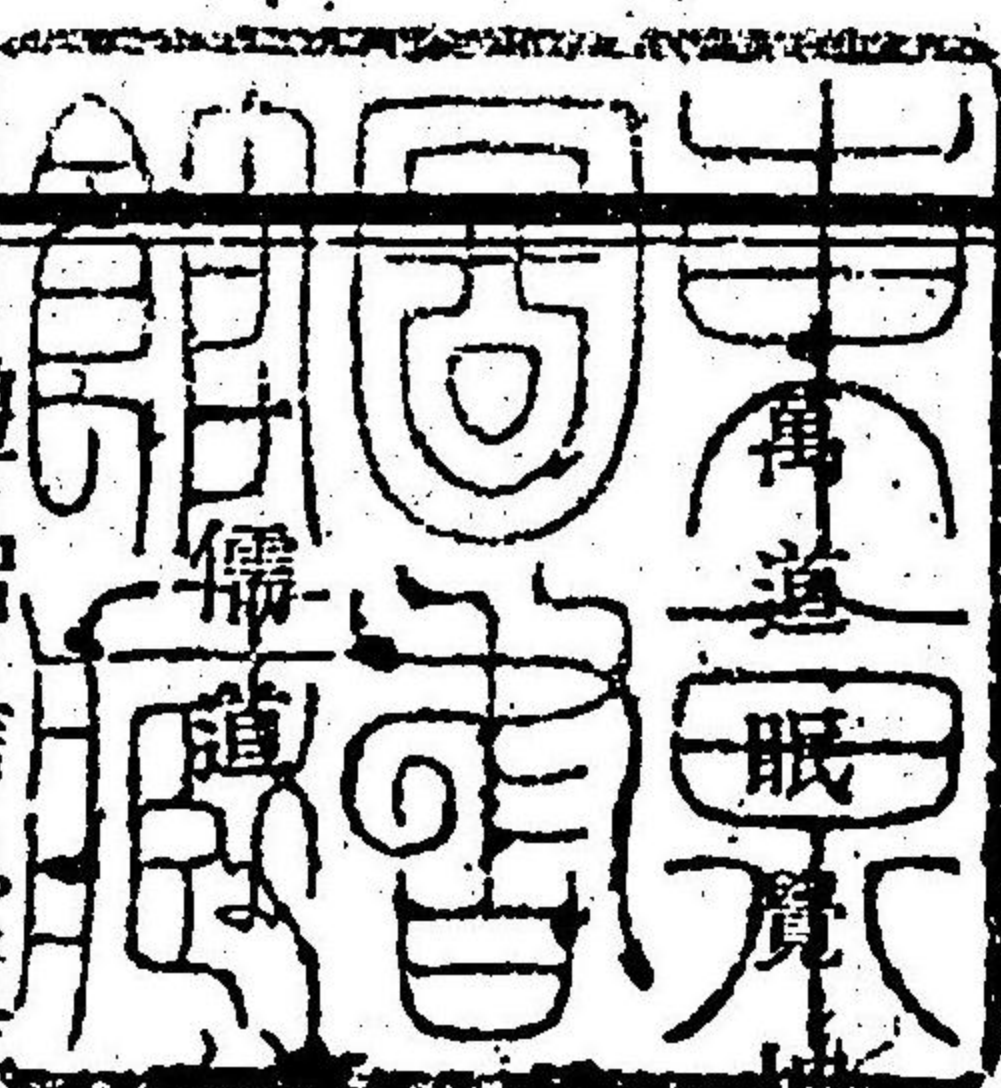
採用ニ相成候事也、相心得申也、然るニ、中山公仰ヨリモ甚敷末世に至りて、報恩の二字を失ひし、よあらざ、索ヨリ、日月天子乃御恵み乃事ハ、更ニ言せ、疑ひを放れて、一心ニ阿彌陀ハ、奉任ニ一佛ヒタスラ只管ヒタスラニ信れば、阿彌陀の依願力ガンリキ煩惱ボンノウモ消滅して、極樂ニ往生ス候事、夢々不可有疑、現在ハ、假ル世、幾億万歳限シマカキ、極樂社、大事也、本願寺ハ、掟シヨク申て、御政事の、難有と背サガカト、一通ニ伸ノボル計ハカリよて、日月の事を

天子の事モ、強テ言せ、不教事故、戸毎ニ勤め、報恩講ハ、法ハ、恩を歡ふ法恩講にて、御大恩を奉報報恩講ハ、ゆるらば、甚以心得難し、右願立之通り伸舌すれば、親鸞殊ハ、外ハ、大徳と思

へり、然るを願立の第一第二に大切なる大ケ條を除きて我
 勝手の能、末の法恩に教るはいかよ、現在にて、今日迄の
 日月 帝に尊大の御恩を不報して、己が得手勝手は極樂に
 勝手次第に行ふといふを、天道に條理を、不弁愚ある事也
 諺ことわざよモ、一向に物志らざといふて、後生大事に、一方向を教へ
 て、だん願愚よは故、一向宗といふり、余に人道を更よ、不教不爲
 聞、不教事故いらざ、左すれば、問答書は違ふ、問答書が空言な
 ら親おや儒にうを讚るよ足らば問答書は、實て、空言をいうたる親おや
 の罪る末世で空言にいた罪り

一心學ハ、忠孝節義堪忍を、主と志て、人倫に顯論を重じ
 神帝之御大恩を不辨、祖先斗りて、佛もいふ畢竟死物の、禪
 宗の、悟り交りや奥義として、儒道に、假名講釋位ひの、小路よ
 して、論ぜらるよ足、大道よあはざ、志らば先生を、始メ身の行狀
 第一よ勤めて、其通りを教ゆる故よ、門人達を不出來の人小
 數上出來人多し、一入ヒトシテ感心ナリ

萬道眠覺乾之卷終



之卷

天田八千夫說伸

明德を明らりよして聖人よなるよハ、忠孝仁義
禮智信を要メよして教へて有所ハ誠ニ結構成道にて唐國

の人道よ於てわ尤最上の道成べし乍併末國此道故よ我

大君此在まます君子國エ比べる時は儒道よ限らす都て臣下

の國此道ハ、關白又ハ將軍以下此人道よして夫ヨリうへよ

二段有第一。敬神其敬神の主ハ幽ハ我魂を傷マシムル事なかれ歡顯ハ肉體生通しひ崇敬

して祝齋り祈るハ、勿論也第二。勤玉誠義其生通一の肉体モ惜

まどつくす勅王誠義次よ孝忠也並ふ也長くも我皇國ハ

天照日ノ大御神都て天津神地祇の御本國よして天孫の
 大君百廿有余代連錦御相續在まして萬國無比類最も尊き國柄
 也尊みモト基モトき學ばせてハ第一三第御教則モトもト察モトる也従前
 て申さば子親倍臣武家武家の司が大名大名の司が將軍此
 間た、くも何れモ命を捨る忠孝が有也故がゆゑも幾人親
 有也雖モ親此うへの親幾人君有と雖モ君のうへに君也依
 て億兆之父母億兆の君と奉申上る也只今ニテハ君といへば
 大君御一人忠といへば勤王誠義又ハ天忠トモ稱居候忠此
 一ツも自然と縮まる紛れ無之様なれトモ道が改まる方て
 ハ更もねらぬ途中に數々有る君が皆消て仕舞ふての事也然

るを唐國の忠孝と同一様に思ふて既も方今子供も専ら教
 ムル明倫撮要トモ杯も父子の親を第一のりみよ出一第二の
 一もよ君臣の義として恐多くも朝廷之御義を出して有也
 其義を論すれば忠孝ハ車此如高輪杯といふより唐西洋よ
 てモ是てよきてよれたいふたり末國の唐西洋が本國此手
 本よえならんぞ朝廷の百姓ナヤミタカラて乍有恐入といふ事モ不弁愚
 かね事論か一ケ様の狼狽者の夢が覺ればよし覺ざれば
 皇國此人民よあらんぞ平ヲ乃重盛此大忠を志らんぞや楠正成
 之、曰奉君對て不足の心發る時は

天照日之大御神之照生一玉ふ事を思へと臣下も教える由

也、又曰我爲よ、君を思ふものハ、ほれども、君の爲よ我を思ふ者ハ、ほれども、言マ鳴呼、忠臣楠氏の神ナリ、西洋の共和政事モ同様

朝廷を除ひて、臣下の内よてハ、尤至極の事也、兎角是迄乃教方甚以、紛敷事よて、忠を主と、言所てハ、忠よ可越、重き事おき、様よ教へ、貞操節義ていへば、又是と、重き司の様よ言、孝て、言時ハ、孝行よ可越事おき様よ言て、孝ハ萬善之長、百行之源と、杯ていふて有ナリ、忠孝節義トモ、銘々獨立乃道よ、當る也、忠と、孝と、を比べての論、一圓よ不承、文明ハ、アヤチ、アキラカニする事なるべし、然るを忠孝トモ並ひ、父子之親、君臣之

義とも、並ひ、前後紛敷事也、右様之味た事よては、文明之趣意甚以建難し、忠孝節義トモ各立比べて、輕重之、文を明りよ見開きて、正教、人道を教ユル事社何ヨリ以テ、第一番先之、文明の、大趣意之要めと、思ふ也、いかにと、文明之趣意を取違ゑて、有様也、肝心要メ、人倫の道たあらべと、疎かにして書籍を博く、學ひて、事を知と、文明の様よ、思ふか、或は、西洋之器械に感し、又ハ、驚ひて、何事よモ、一切閉口する様也、器械之珍し、たハ、珍しき也、尊たを器械之尊きの也、能は、能て、用ひてよし、夫に畏恐れて、何モ、角モ、國体よ、合不、合用、不用、善惡の分別も、不糺して、頻リニ片寄ハ、惑ふといふもの也、器械ハ、窮利に

賢きを、細工事に、鍛鍊たんれんを、して居のにて、夫ハ夫丈之事柄ことばも、チ
 イテ、尊きの也、國休こくやすていふ時は、手足てあしを、掌つかさどる國代役也、故も手
 足を介くるの、器械多志、我國休ハ、命いのちと心を、掌つかさどり、形かたちちて申さば
 首頭カシラを、掌つかさどりて萬事見譯、聞譯、言譯ケテ、萬國ハ、萬國丈、我國休
 ハ、國休丈夫こくやすと、人倫の道みち、アヤを、明あきららりよ、見譯ケテ、手引てびきて
 遣が、我國の役也、しりるを、書籍を、博く、學べは、道モ譯わけり、文明
 之様も、思ぬおもぬれども、道もよ、銘も得、手勝手の事を、書て有
 書籍を、色も見居と、余り書籍モ、數が多過て、天道を、しらばし
 て、見ても、ハ、惑まどひが、出來て、却て、譯が分らば、よし、迷わぬも、せ
 よ、書物も、書て有事が、讀兼よみかり、讀た、所が、讀も、譯わけり、譯が分

マ兼たマ、讀て、譯が、分らと、上あれ部と思へ、是ハ、漸ゆるく、形も、れ
 うへの文明といぬモノよ、て、間ま怠たき、慰なぐさみよ、似た事也、本直中
 心こころも、天道之寔を、受けて、文明する時は、一と聞て、十が、分り、十
 を聞て、百が、分り、事柄も、依て、ハ、不聞事迄モ、心も、開ケテ、隨分
 書物位しよぶつゐひハ、編あまれる也、古いにしへ一ハ、中古之、人の書た、位ゐひも、物を見
 て、書籍を、編あむ位ゐひでは、我神國、神一休之、真之、文明開化と、ハ、言
 難たがい、部ぶて、古いにしへ代之、書籍に、有位ゐひも、事も、變革へんかくするハ、未曾有と
 ハ、いわ終はつる、古今之人ここん代、言モ、仕モ、せざる、新たに、開ケる事
 よて、天地の定理も、顯之、法論も、合、能事が、開ケテ、其アヤ
 が、明かよ、分りよ、事柄を、思ひ切て、速やかよ、改メ、變る社、文

明開化トモ、未曾有之、變革トモ、以ふべし、畏クモ、天子ハ、輝き
玉ふ、日の御子也、しふ、まや、かゝるが故に

天照日ノ太御神エ 皇帝之、御孝行、有ト、いふト雖モ

朝廷之、御上也、民トハ、九て、違ふ論也、下方庶民エ、臣下之國也
孝經杯、教へて、孝ハ、萬善之長、百行之源と杯と、以ぬ事を教へ
て、如何するや、是迄、皇國之天道開ケざる内、ハ可也、天道開
ケ以來、右様之事、教へては、萬民之感ひの種也、孝ハ、萬善
の手としめよとて、百行の糸口ナリケ様、いぬても、親之恩を
軽くいぬてハ、聞違へ、はいぞ、軽くいぬてハ、必シモ、ゆるぎ、限
りなき大恩と思ふべし、其上が、開ケ上るの也、大恩有親モ、其

祖^{ミヤコ}トモ、開闢以來、今日迄、奉蒙有

神^{ミカド}帝之、尊大之御恩、比スレバ、親之大恩と言と雖モ、万部
ケ一に、不及、まゝいぬても、親の恩義を下る、まゝあらざ、其大本
元之尊大之、御恩を遙か、尊う仰ぎ、上ケて、いうれ也、既に過
よ、頃、大和の天忠浪士の、いふにも、諸大名、旗本、武家、都て將
軍、徳川家の、三百年來の、恩義を、言立、開闢以來、其恩義を、忘る
、とハ、能いふた、感心の事也、是等が、文明といふ物也、其邊の
アヤが、明りからざるが、故に、恐多くモ、朝敵モ、出來て、夥敷^{オホシヤク}人
命を失ひ、也、誤りわ、早く改メ、んば、是等と對してモ、耻入
事也、唐國に、ナイテ、ハ、神君有て、御生し、御育て、被下有事と、

くは我ハ、我が生いる居て、親が人力ヲ以て拵へ、産出した、我子の様も思ふが、故も多ひ恩の中よて、親の恩も、可越事かた様よ、思ふなるべし、無ニ神君國よてハ、一應、尤之事也、しりし、各國の人間也、雖モ、人力ヲ以ハ、指一本モ、出來る答ぬし、造物主よモ

日ハ神も、地も、天地の生物の、徳をらてハ、人は、勿論、生非情之草木迄モ、神徳神りても、出來されども、人徳人もてハ、猶出來、神と、人との、徳を合せて、生スる物也、人力半りと、思ぬハ元と忘らざる乃論也、追々各國エモ、手引いて遣が、我皇國の權敷也都て其邊も心付て、忘らべて勤メ、又教ユル學者、甚稀

也、年久敷、慣用クワンヨク物、事なれば一時も改め難く思ふ、なるべし

天理人道を明らかふ、すべし、の、御教則猶舊來の、陋習を、破り天地之公道も、基くべし、の

御誓文も、畏りて、天道幽理の、執行有よしし、猶、仁徳ヲ以、聖人に、かゝる道なれば、書物讀み、鼻高大酒遊女等に、ふける向ハ、論ぬし

一トホカミ講、大祖ハ、井上鐵正先生也、いふ人ナリ、教導之、趣ハ皇國ノ道と、辨エ、天津祝祠ヲ以て神を祈ると、元と忘て、神君親師匠也、四ツの恩義と、重シ、厚く報じ、鹿食鹿服を着して、身

を勸メ、信ぜらるる人の病も治り、心得違ひの者、改心して、家も治り、依てわ、神信心も、勸王も一通り厚し、人代交り、忠孝誠と、元々も、人利を勸メ、古人又ハ、中古の大人方代、金言と、集メ和論語、稱して、道の手引草として、人道を、磨く事、至極感心あり、是より神人、一体を辨エる事、簿し、依て、神の御心を伺い知事不能、故に、道の文明、不正今一層勉勵して、神の御心を知得て、獨立之道も、知らざる様、天下の大道を、見附て、勸得度事ナリ。

一報徳流を、相州小田原の人、二ノ宮、金四郎ト申る人が、元祖

よて、在世モ、高德の人よて、大小名の趣法よ、頼まれ、趣法相立られ、候由ナリ、今と門人ヨリ願立、官許と相成居候、趣傳承ナリ、道代大旨ハ、四海兄弟の誠を考へ、家業之余金有ば、道之資本金よ、備エ、猶儉約と、吝惜の差別を、能弁エ、長然敷して、葉手と務す、身分を責め、儉約をして、資本金を募り、貧者を救ひて、捨子を育て、都て社中苦樂を、同ふして、睦敷、天下國家代御爲よハ、資本金ヲ、思ひ放して、夫ひ、聊の費へを、厭ひ、時間を斗りて、勉勵して、不遊天恩を重して、月日とあだよ暮さ、休日杯よハ、申合務て、道橋以直シ、神信心少く、勸王モ少く有、五情五倫之道を守り、人利を主として、勤むる故に、門人不出來の、人小

數、於三人道一を寔に感心の道ナリ、併し情弱を直すべきハ、論を不
俟^{また}勉勵ハ、至極ナレトモ、生通一を不知故に、體を^使比過して
體に障る事を不厭心を傷ましむるに依て、煩ひ年を寄せる煩
ひ年を寄るに、覺悟して年を寄せ、死を覺悟して求めて死を
といふ事を、いらざ、故に、肉體を保つ事不能人倫の顯論ノミに
て、幽學ナシ、今一層幽學信心勤王を抽でて、猶生通一ハ得ズ
トモ、我命を自由自在にする事を受得て肉體長壽さを保ち
得る、場合ハ、執行有度事ナリ

但トホカミ講報徳流トモ、開發后、年曆を不歴故に、道の上
これとくなく

一神道古典學者並、神官之中ハ、格別ニ秀てる、人モ、可有其
人を除いていふ、天地神人國の始り

天皇御系圖、並ニ、古語之いらべ、行届き、至極廣大なる事にて
其巧徳揚て、算^{カッ}へ難し、乍併古一への、神の尊き、物語ヲ^述と
て、敬神之、信心よて、尊き功德を、現し事を、いらざる人多し夫
や申も、形ちて敬神よて、本心は敬神よ、いたらざ、故に神様を
置物よして、敬して、却て、遠ざくると、いふも、尊ひ理屈之、離^ひ形
の、行義斗りよ成て、懺りよ、神を見ざるが、故也、古學者之、鼻高
ハ、古一への事柄を能しらべ、古語の講釋を、長くと、説、祝詞を

能作り、哥學をいらべて、哥をよく詠夫、結構成事ぬれども
正月仕事也、其故ハ、是迄日本ニ有來耶蘇教杯モ専ら開け
んて、大心配中也、古くは神サシ自慢、又ハ祝詞之文作
を能いて、字配りハ、雛形位ハの自慢にハ、神モ感納せ、外教
モ、不恐先夫ヨリハ、外教を防くり、願くハ、隨從せざる、我國
急務之事柄相濟、荒増目出度ハ、調ふて、而して後ハ、言の葉
モ違ふヨリハ、違ハぬ方、漢語ヨリハ、和語がよし、文作祝詞モ
下手ヨリハ、上手がよし、哥モ無法ヨリハ、てよとを命續き文
字の夫ひごま、墨繼等迄も、能調ふる方、がよしと、いふ様な事
ハ、一切跡廻さよして、差向誰が聞ても、説諭モいらざ、早分り

が、流る方を、本体にして、貫いた物ぢや、都て外教ハ、安託客
人か、かゝる人也、神道ハ、皇國ハ、亭主の道也、依て、外教を、從わ
ざるハ、國學者の、受前ぢや、然るを、本末前後之、取違ひが有、譬
へて見れば、煤掃して、大ケを煤芥が有のよ、其大芥ハ、取ふと
モ、除せよ、取らぬ先、掃除之、仕場乃、箒目から、先エ附ふと、す
る様な物よ、差向間よ合ぬ、咄し也、師走が、來て居れに、師走
ハ、世話敷、仕事ハ、捨置、正月仕事ハ、先エ流る様よ、思わると、
也、近頃にて、わ、御政事之、御威光ヲ以、三第御教則を、諸道之
頭らよ戴き被せて、有故よ、神道モ、急度可引立、答ぬれども、ど
ふモ、格別之事ハ、藝題が、能てモ、役者ハ、小數、各道之中よ、て、

神道ハ、皇國之、大道なるが故よ、可爲天道答ふれども、神道の
始りを譬へて見れば、神道の鶏卵其鶏卵也、時の事を書て有、
古神典のみを固守して、神道の鶏卵が雛子と、花鶏りと、成長
して、追々太ッて、神道也、鶏子が羽叩きと、高聲夜明の
時を告て、萬道の目を覺ますべき、役ぢやと、いふ事を、忘ら
して、鶏卵の、時代、論議りをして、聊モ不勤、無古典事を、少一モ
用ひぬ杯や、いふて、己と、己よ、道と、ちいれくする故よ、外國よ
負る、然れども、古典モ、書よ依て、色と違ふ、廉有、其是非、いか
ん、然せば、譬へ、古典に、ぬき事又え、新規之事といふトモ、能事
ハ、能と、改メずんば、何ヲ以、未曾有也、變革の出來る哉、神ハ、死

物よ、何ら終ば、生物也、生物なれば、動く、動れば、變る、其上、神議
りに、依て、いりある事り、出來ん、左すれば、幽宜モ、昔一と、同
事てわ、有まい、色と神議マモ、か、はり、幽宜モ、榮へら社、顯世
モ、穢れ成よモ、榮へて居や、いふ事よ、更よ心付らるき、知て、
新らしきを、不知人の、師匠といはれど、故よ、萬道同例よ、成居
事、誠よ、歎歎次第也、神官ハ、未だ、不徳として、僧侶ヨリハ、ばけ
の藝が、下手よて、衆人の、誑きれど、依て、舊神官、歸俗と、正体を
現わさ終らる、新任也、神官ハ、願くば、化せよ、神習ふて、神よ成
給へが、若難成思と、ハ、歸俗よ限る、神國で、神道を、開く難有
さに、恐多くモ、朝廷之、御威光を、頭心に、戴き、御用觸よて、呼寄

て、權威て聞せる、説教が、兎角綻り、開かぬや、異國から來た耶蘇教を、精く防くに、忍々黙許位ひを幸ひに開くも、専ら開くるといふ雲泥黑白之、違ひ目よて、眠りの夢を覺すべし、殆んと末國の、附屬と陥んモ、口惜かたきや頗る皇國此、人民もうまれ居ぬら、末國の教下よ、首べを屈むるわ、耻辱此甚敷よ、あらざや、いづる我隨わざや、國民の惑ふハ、國學者之穴也、然れども、神之御心ヲ以、顯現來り有、萬道なれば、廢するも、神に御心よ不叶、勿論神國は、萬國の眞國なり、眞國を、親國也、親國此道なれば、神道が、親道也、親なれば、萬道を、養ひ育てるが、親乃役也、神道が、太ッて、天道の、心よ成て、萬道トモ、神道の、生だ

る、于此道と思ひ生來の質ハ、一時にを、不直親の、慈愛の、心ヲ以其道之中にて、目利志て、惡敷は、善よ直し、人を賢人聖人よ志て遣又佛ケよして、遣銘よ好なふ道て、手引て遣て、而して后、生神よ取立て遣社、神道者之、眞之鼻高や、いふべし

如前條一申てモ、萬道とモ根方ハ、天の命を以、地球之中よ、御顯しに、相成萬國ヨリ、我皇國エ、獻上して有、道故よ、國益此多少ハ有トモ、九て、惡敷道ハ、一道モ、有間敷答也、耶蘇教西洋學モ萬道を、磨くが爲に來て居也、今日凡眠ヲ以、見處てえ、惡敷様かゝ道ても、神眼を以、見る處てハ、必善所が有べし、只、公私、幽

顯、顯未來、大小古今、本末、國柄等此、違ひ目、有迄此事なり、則、檢
査を志て、夫、道此高下之位ひを定め、猶一道の中にて、用
不用を、分別するが我國此役あり

右諸道とも聊宛の高下、大小、甲乙ハ、有、雖モ、何れモ、一己の
私之道にて、天道にあらず、我門を、獨立するのみ、其獨立も、道
之本体を見附て、執行すればよ、然れども、道も可入道具、雛形
之爲も、持へて、出して有、書物を讀事を、目的として、書物此う
ゑ乃、研窮此、勝負位ひを、要めとする名利の爲の、執行多しケ
様、言ふも、書物を讀事を、惡敷といふよ、必しも、あらず、書

物を讀ば、書物も生根を入れて、要めを忘れといふ事也、文字書
籍が、有ば、社古しへも知れる、既に此書モ、書きたる、可尊物也、志
り、天の定理を、弁へて、不可迷、書物を、讀事を、學問之本体と
ハ、いふは、道を問學ふが學問也、取違へたる、人モ多し、言の葉
を以て教へ傳ふるが、本体の國体也、故に言の葉を以て、傳ふ
るが第一等也、文字書籍を以て傳ふるハ、次なり、然ども文字
事柄を能し、くべて、知ると要め、或は、學風モ、有故、文字知
事柄知之、學者ハ、多けれどモ、道を得て居人ハ、すくなし、事柄モ
文字モ、いらば、道ハ、猶志くざる者よ、是は、よけれど、事柄文
字を、いふヨリモ、道を知得る方が、本体あり、道此本体ハ、誠の心

也、心の形が、言ばなり、言葉の形が、文字あり、心よ、天地に、寔を得るが、道也、讀書は、學問、文筆は、藝也、藝を、元よ、一、道と、后よし、文字ヨリモ、言の葉を、次よするは、本末之違ひ也、元來、書物といふ物ハ、天あるも、降る地からモ、生^{ハレ}る古^{ハレ}今^{ハレ}ハ、人ハ、言の葉を、書留たる物也、左^{ハレ}れば、いふたる人の心^{ハレ}するが、要めなり、既^{ハレ}此書モ、慰みてモ、戯^{ハレ}てモ、慰口といふても、名利ハ、爲ても、お^{ハレ}譬へ、文中如何成事、有^トモ、惡敷^キを、斷る、只、磨^ラせたい、心根を^{ハレ}戯^{ハレ}れよ、見ては、何よモ、お^{ハレ}立^レ人^{ハレ}わ、取よら^レ本氣^{ハレ}て見れば、腹モ不立、歡ひて、慥^ニ夢が覺るなり、扱^キ此、文作乃、拙きを笑ふ人よ、言、道も、得て、居、文作モ、能出來る、人よハ、閉口^{ハレ}然^レれども、其

様ぬ、尊き人ハ、見^レ道とモ、素ヨリ、知^テ居故、見^ルに、不^レ及又、道ハ一^ラ道、文字知の、學者よ、文作程、上手^{ハレ}人よ、わ、閉口せ^レ道^ハモ、お^{ハレ}文作ハ、善惡も、しら^レ凡人よ、聞せて、譯が、早^ク分りが^{ハレ}て、改^メ心^{ハレ}る、心にか^ラせるが、爲の事也、然れも、六^ケ敷、漢語、或ハ、和語^ハりよ、モ、チツタ事を、書^テ通^シければ、何程、能事よ、せよ、諺^ハよ、猫よ、小判^ハで、譯が、分^ラ道^ハわら^レざれば、忽ち用弁せ^レ用弁^ラざれば、尊き物が、却^テ死物^ハなる也、お^{ハレ}一、認る品柄よ、依^テは、文作の能事を、要めとする、事モ、可有^ク様の事に、分^ラを、主^トす、譬へば、ユウシン、ユウシヤ、いふてハ、不^レ分^キノヘチ、ユウシンと、いふハ、音訓交り^ハ俗通

也、俗通の、重言かたことと交りの、長文談よて、見聞苦敷候得ども、箸ヲ以、含くえぬ様よ、子供ハ、子供相應に、分るが、要もとえ也、生物也、以るはから、分る様よ、教ユルが順也、爲也、然るを、諸道とも、文作の善惡、文字の天ひさま、等を要めよ、以ふり、都て、未乃方が、元よ成て、肝心要め乃、誠の魂ひが、ぬけて、雛形の表を、飾かざる、化粧けいずなりよ、骨を折て、萬道トモ、死物也、成居と、見へり、可悲事ならざや、生いきの、誠の生根を入れて、生いきのき物也、其上、譬へ、最上よ、磨上たる人よ、モ珍よ、古一へ、此、書籍しやくりよ、當テよ、固守して、神と、釋迦孔子、其外祖師並よ、宗忠の神、又ハ、ヤホハ、キリストウ杯と、いふ、古一を、又ハ、近世の、尊き神人を、尊み、我祖師ノ、師匠

ハ、尊比也、いふて、我ハ、迪モさふハ、よふからぬ也、思ひ極めて大祖と、祖師の、二重天井てんじやうと、張詰、其下坐敷よ、箱を、拵へ、其箱の中よ、這入て、ちいさく成て、居を、敬ひ乃様よ、思ひ、又ハ、道が凡人エ開ケ、日々隨心彌増、世間よ、信心の徒が、多くなれば、道が開ケる様よ、思ふけれども、是大ひなる、心得違ひ也、道元が次第よ、開ケ、登りて、尊くある社、道が、開ケると、以ふ物也、道元本ハ、元太末細りよ成て、道の末の、末が、廣がる乃也、譬へて、見れば、濃こき煙りが、立て、次第よ、廣が、さて、後よハ、薄く、ぬえて、消て、仕舞と、同一事也、道が、細りて、消て仕舞と、好、神佛聖賢人ハ有まじ、古一を、此、神佛聖賢人ヨリモ、尊くなるわ、無禮むれいの様よ

思ふら、又わ、産れ付くら、丸て、違ふと思ふるべし、古一へは
 神とい、同根同体は者也、唐天竺ヨリハ、産付くら、違ふて居也
 違ふて、居といふても、却て、能方エ、尊く違ふて居て、いふ事よ
 心付て、勇氣の、權敷を出して、大祖哉、祖師の二重天井を、打破
 て、尊ひ場合エ、踏抜て、見れば、明らかか、道が見へる也、出拔事
 を社、神佛聖賢人トモ、好み給ふべし、門人の、出精、世の榮へを
 嫌ふ答ふし、歡ひて、介ケ導た、給ぬ事、夢々不可有疑斯る、文明
 開化此、時よハ、日夜よ、道が開ケ太り、開登てて、末廣末太の
 天の大道が、發りて、末細の道ハ、末よは、次第よ、消て、仕舞モ
 一れぬぞ、御油斷有間敷事也、日新開化よ、進み方一、師匠ハ

誤る有ば、改メて、師匠とも、造り、尊ひ場合よ成て、師匠を、仰
 く社、真よ、尊ふて、いぬ物也、夫を、大ひよ心得違ふて、居ナリ、我
 斯いふと、雖モ、相輩ハ、事よて、聊の耻也、万一、各國人ハ、侮^{あやむ}る、嘲^{あざむ}
 りを、受る時は、皇國ハ、耻也、皇國ハ、耻辱ハ、乍恐 皇帝ハ、御耻
 辱と成也、左すれば、早ク、改メすんば、人よ侮らば、是丈、深切よ
 いふても、頓着モせざ、腹モ不立^{いまだたふ}憤^{いまだたふ}をりて、研窮モよふせざ、感
 心して、改心モよめせざ、負惜みハ、穢^{きた}かき心を持て、是ハ、斯い
 ふ、物ぢやと、いふよ、斯かれば、是よ可越事也、かけれどを
 誰モ、斯は、よからぬと、いぬて、見捨にして、捨置者ハ、死物ハ
 あまくらよて、穀潰^{ゴクヅ}りしと、いぬ者也、うが中に、上ハ、部ハ、道の

本、体よ、心付て、道の開ケと、時ヨリは、大ケよ、劣りて、道に草が生て居と、心付て、精々道の草取に、骨を折、歴々も、數々有とモ元來、天道有事と、いらざる故に、我道を、大道と思ふて、我道に勝れ、覆れる、道も、天地よ、似た様よ、思めて、小路を、いぬ事に、心付人、甚稀也、譬へ、私の小路にもせし、其道々の元目と、見付て賢聖人佛神よ、可成道ぬらば、神佛聖賢人を、仰き尊み、限りなく、信し、靈現利益と、十分よ蒙り、人力之、限るを、盡し、神佛人の力らの、限る磨き揚、此身此儘、奧義よ至る、神道者は神明との本の主じよ、至り、死して此後の、神ヨリモ、肉体之儘、幽顯兼備之生神とあり、佛者ハ、即身成佛の生佛よあり、其外の道よてハ

天理人道を、明りよ成て、人間之、世界を放れ、出拔た、明德の明りある、聖人よ、成て、而して後、仰願くハ、萬道を打込、一ツの大道として、萬道の中よて、善中の善を、太々、善中ハ、惡敷を、ハハひ、惡敷中の、善を取用ひ、惡敷中の、惡敷を、善よ、直し、善人の、罪をハハひ、正直を、誠よ、教へ替、小誠を、大誠よ、取立、小忠を、大忠よ、直し、古今之、違ひ、國柄之、違ひ、目を、弁へ、有難くモ、天之時を、以て、幸ひ成哉、神之御心ヲ以、
朝廷ヨリ、御顯しよ、相成居候、三第御教則を、目的として、居眠マレ、目と覺し、磨上るた事、なごせや、長くモ、萬國の、公法を用ひて、未曾有之、變革を、遊ばさるハ、御一新之、鉾先ぬれば、我

一人の天地と思ふて、人よまりせど、譲らざれば、劣くぞ、勇氣獨立
之、權敷ど建、賞く天忠を、尽し度者也、たとむ、何道を、學ひて居
人よもせよ、醉さばよ、万一醉て、居人ハ、學問之、醉を醒し
て、我足元を見れハ、神の胤にて、神國よ生れて居
皇帝の、大御寶の、御民なれば、第一、萬道を、從へ、次よ、萬國を從
へ、兼て、被_ニ 仲出有之 皇基を、振起すべいの
御誓文よ、基き、一天之、
大君_ハ、奉爲らば、忝くモ、日本よ、生れ出さる、甲斐有る、皇國
代、神臣民_ハ、以ふべし

我右之場合、勤り居といふよハ、あらざ、殊よ、無學文盲よて、讀
書、文筆之、學問拙し、依て、文作等、甚下手也、訛り違ひ、カタコト文字違
ひ等ハ、斷り置也、しるゑ、精く寔の、天道ハ、勤めて、見たれ志どし
かり、右文中、万一天道よ、不叶様、思召之、廉も、候ハ、偏に、再問
を、乞願ふのみ

身を捨て寔を建る英雄の
こゝろよかゝる雲霧もかゝる

一我先見を、聊言べし。文久二成年、於泉州堺後家尾代、夫を持事
と見たる。元治元甲子年二月、讃州三木郡原村にて、諸大名武
家と、廢して、君する者は、大君御一人、御自らの御政事を成事
御一新之、大趣意荒く、又明治三午年、藝州於廣島肥前之國大
村の、切支丹信者、諸大名エ、御預ケ之節、耶蘇宗之、専ら開ケる
事、攘夷之、出來ぬ事、其外御一新之、廉く、荒く、先見仕る、疑思
ふ人ハ、右之土地よ、至り間、試むべし、聊違ふ事なり、乍併、是等ハ其時
よ、聞て、居る人ハ、疑ぬ心、有間敷、けれども、今此書を、始メ
見る人を、跡より言事故、勝手次第之事を、言や、思ふかるべし
其證よ、右疑を、晴さんか爲よ、此後代、先見代、端を、聊言置べ

一今女や、男は、男の權敷、余程高し、此次、同權位ひに、成て、追
女子の、徳彌増盛ん、所謂地天泰、茶白や、いふ時が來て、女の
方が、高德よ成て、縁の切結ひトモ、女の、勝手次第、女々離別狀
三行半を、出ス、様よ成て、甚敷ハ、男辛ナトコテカケを、持、様よ成て、女夫よて
御政体を、預る様よ成ナリ、男から、女はれる様よ成べし、此先
見、聊、違ふ事ナシ、此不違を、見て、是迄の先見無間違、廉、猶此後
肉休生通し、杯の、疑ひを、晴すべし

一年と不經、ぞして御蔭參る有て世の中の清り縁代替る事、有べし、又心
有人民ハ、皇帝の、大御寶ある事を、辨エ、相續獻上代、とる

申て、土地、家、諸道具トモ、一切相續の儘、献上スル事、なるべ
し、我先見高慢之爲、出スよ、ゆゑ是等を、確証せ、証據
、肉体生通しの疑を、晴ませ度、思ふが故、出スナリ

一我曆學ハ、聊モ一らど、おれども、順氣大陽曆といふ曆を、編出
とて、居ナリ、時不至故、御採用よ、不成無程、天代時至りて、地球
一般よ、用ゐる時來て、御採用よ、成事必せり、其時直よハ、おるま
じ、おれども、月天高く、成て、二十八日余よ一周とて、三十日三
十一日の一ヶ月よ、合、十五日満月と、成て、順氣大陽曆よ、合様
よ、定む事よ、成るナリ、年曆ハ、月見定メ難

于時明治八年乙亥三月

右ハ、明治八年、三月著スルト、雖モ、世代未開を、見て、延び、日
新開化之時故、今、漸、聞へる迄よ、開化せり、依て、櫻木を、起せ
、~~業~~業を、頼度、思ふて、八年以來、八年之間、心掛ケ、尋ねれども
未々、其人よ、不出會、偶出會て、見ても、何程之、高名家と、いへど
も、漸、一道の達人よ、て、片寄たる沙汰のみよ、して、天の大道を、ら
見、る時わ、矢張片輪ナリ、爰よ、一ツの断、有、世人の、知断、お
れども、符合せ、断、故よ、出ス、有處よ、盲目三人出會て、其咄よ

志舎、其外各道何れも同様よして牛代、全体を不知論、ナリ其上、諸道諸教トモ、言行一致ナルも偶よハ、アソドモ、言行一致ナラザル向、多し高座よて、教導之時ハ、神ハ佛ケハ聖人ハの様よ、聞ゆれドモ、漸高座此、うゑ丈よて、不斷之業ハ、凡人よも劣る様ナル、化物モ、稀よハ、アリ、是、神佛を、不恐故ナリ、却て耶蘇教よハ、大ケに、恥入事ナラズヤ、然はを、情心の、徒と、思ひ、込の迷ひ々、道の明ひ、味ひは、素々大小、善惡も、しらべず、形容の看板を、もさ流山子めきよは、事が、布流るけれども、是も、未開の沙汰ナリ今よ、世上が、開化して、小兒を、誑らかす、様を、贗物てハ、いりぬ、眞實、正味代、事ナラデハ、通用を、せぬ、世乃中と、なるべ

一、天道を、得よは、人世よ、有ハ、いらぬども、我、未得ニ出會ニ故よ、不ニ止得ニ序末ナク、我が受ぬてある、志一の、百分之一と、獨立よ、及び出ス、者也、天下國家代、爲よ、志し有人ハ、再問ナ乞、

限なき天代大道の其中よ

小枝よ分る諸く乃道

明治十~~六~~年

月

天田八千夫

萬道眠覺坤之卷終

明治十六年一月十二日板權免許

同年同月出版

著述兼

出版人

廣島縣平民

天田八千夫

備後國神石郡中平村
第四百五十番邸

愛媛縣讚岐國多度郡
多度津村寄留

發印
賣刷
所兼

梶原活版所

讚岐高松西新通町

全

全書籍店

大坂北久太郎一丁目
七番地

